

環境への取り組み

(2024 年度版)

<目次>

表紙

環境マネジメントの体制	P2
事業活動における環境影響	P4
環境に配慮した商品開発	P5
CO ₂ 排出量の削減	P11
水使用量の削減	P15
廃棄物排出量の削減	P17
オフィスにおける環境配慮	P21
社会・環境活動	P22

対象組織（2023年度）

法人：(株)Mizkan Holdings、(株)Mizkan J plus Holdings、(株)Mizkan、(株)Mizkan Logitec、(株)Mizkan Partners、(株)中埜酢店、(株)Mizkan Asset、(株)ZENB JAPAN

<常温品工場>(株)Mizkan（栃木工場・館林工場・大阪工場・三木工場・美濃加茂工場）

<チルド品工場>(株)Mizkan（館林工場・三木工場・美濃加茂工場）

対象期間：2023年度（主に2023年3月1日～2024年2月29日）

対象：主に環境保全に関する側面

発行日：2024年11月

※2024年11月時点の情報を掲載しています。

問い合わせ先 Mizkan お客様相談センター
住 所 〒475-8585 愛知県半田市中村町2丁目6番地
電 話 (フリーダイヤル) 0120-261-330

環境マネジメントの体制

環境管理に関わるルールを策定し、環境負荷低減の活動を推進しています。

<推進体制>

国内の環境マネジメントは、(株) Mizkan Partners の品質環境部が課題調整と実行および全体のとりまとめを行っております。



<環境関連法規への対応>

エネルギー使用の合理化

工場、営業拠点などの全事業所で使用するエネルギーは、「エネルギーの使用の合理化等に関する法律（省エネ法）」に基づき省エネに努めています。

大気汚染及び水質汚濁防止

工場で発生する排気ガス及び排水については、関係法規及び条例に定められた基準を満たすよう処理しています。

廃棄物適正処理

工場や研究開発部門、オフィス等で発生する廃棄物は、分別を徹底し、「廃棄物処理法」に基づき適正に処理しております。

フロン排出抑制

工場、営業拠点などの全事業所のフロン類を使用した業務用冷凍空調機器について、「フロン排出抑制法」に則った点検・管理を実施しています。

容器包装リサイクル

「容器包装リサイクル法」に基づき製品化した容器包装の量に応じ、公益財団法人 日本容器包装リサイクル協会に委託する方法で再商品化をしています。

食品リサイクル

「食品リサイクル法」に基づいて、リサイクル可能な廃棄物は再資源化に努めています。

<環境事故・法令等の違反の状況>

環境事故・法令等の違反

2023年9月13日、美濃加茂工場において処理が不十分な排水流出があり、行政報告いたしました。周辺地域での被害情報はございませんが、行政からの指導のもと、流出した浮遊物を迅速に回収し、原因究明及び、再発防止策を講じたうえで、9月21日、通常稼働に向けて生産活動を再開しました。

苦情の状況

分類	件数
大気汚染	0
水質汚濁	0
騒音・振動	0
その他	1

工場近隣で農作物を栽培している方より、工場の植栽が日陰をつくり、農作物の育ちが悪いので、伐採して欲しいとの相談がありました。対象区間の強剪定を行い、対応させていただきました。

苦情をいただいた際には、速やかな対応を図り、地域の方々との良好な関係づくりに努めています。

<環境リスクへの対応>

ミツカングループでは平常時から各部門でRM課題の管理を行う体制としております。環境に著しい影響を及ぼすおそれのある事故及び緊急事態など、万一そのような事態が生じた場合、リスク発生時の情報伝達ルートとそのリスクに対応するための緊急対策本部の体制を定めて周知を図っています。

ミニトピックス

サステナビリティ方針を開示しました！

ミツカンのグローバルサイトに新たにサステナビリティのページ^{*}を追加し、私たちのサステナビリティ方針を公開しました。この方針は、未来ビジョン宣言の実現に向けて、気候変動や水資源の枯渇などの大きな環境変化にどう対応していくかをまとめたものです。

サステナビリティへの取り組みは、今や世界中で欠かせないものとなっています。ミツカンも世界各地で事業を展開するために、グループ全体でこの課題に取り組んでいく必要があります。

これまでミツカンは、未来ビジョン宣言の公開をはじめ、水資源の保護や森林保全、京都市との協力など、さまざまなサステナブルな活動を行ってきました。これからもミツカンらしさを大切に、皆さんに選ばれる企業であり続けるために、サステナビリティ方針や具体的な取り組みをグローバルサイトで公開していきます。

※サステナビリティのページ

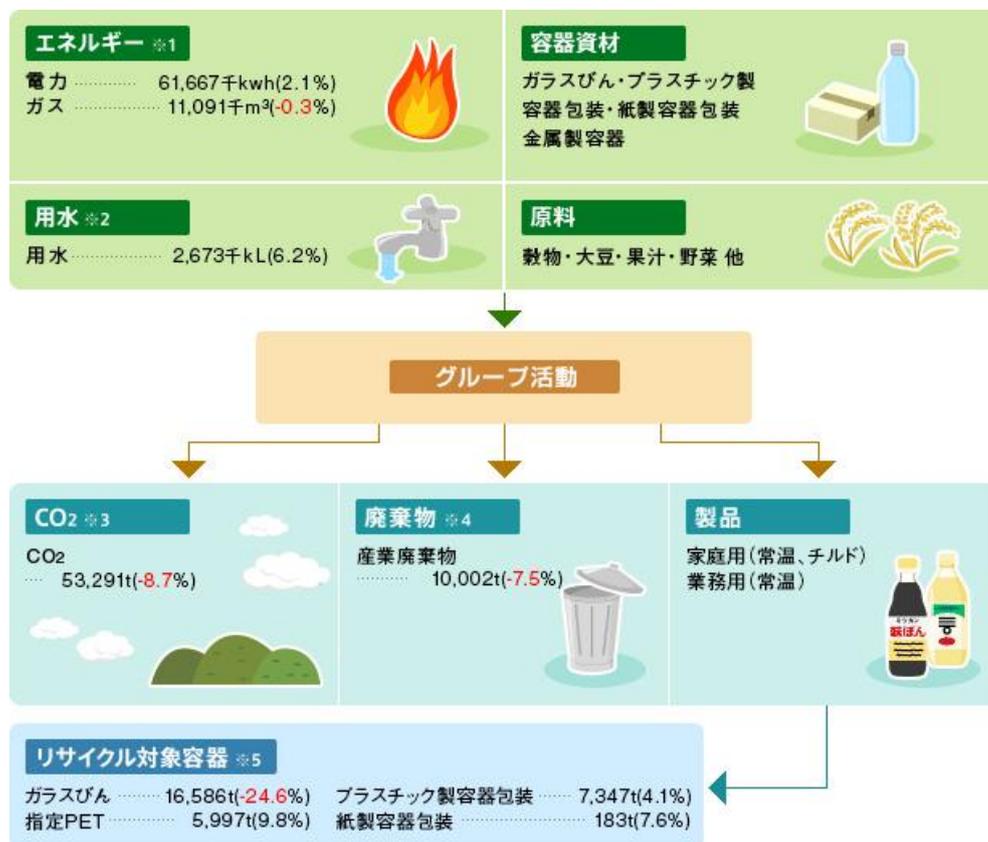
<https://www.mizkanholdings.com/ja/sustainability>

事業活動における環境影響

原料・資材・資源の投入から、事業活動の各段階で使用した資源・エネルギーを把握し、環境負荷量を集計・分析して、できるだけ環境負荷の少ない事業活動の実現をめざしています。

<2023 年度事業活動における主要な環境負荷フロー>

対象は、日本国内における事業活動となります。()は前年からの増減比です。



※1 エネルギーの電力、ガスは工場・本社・研究棟及び全国の営業所の合計です。

※2 用水は、工場使用分の合計です。

※3 CO₂排出は、使用エネルギー量から換算しました。

※4 廃棄物は、工場廃棄物、製品廃棄、本社・研究棟廃棄物の合計です。

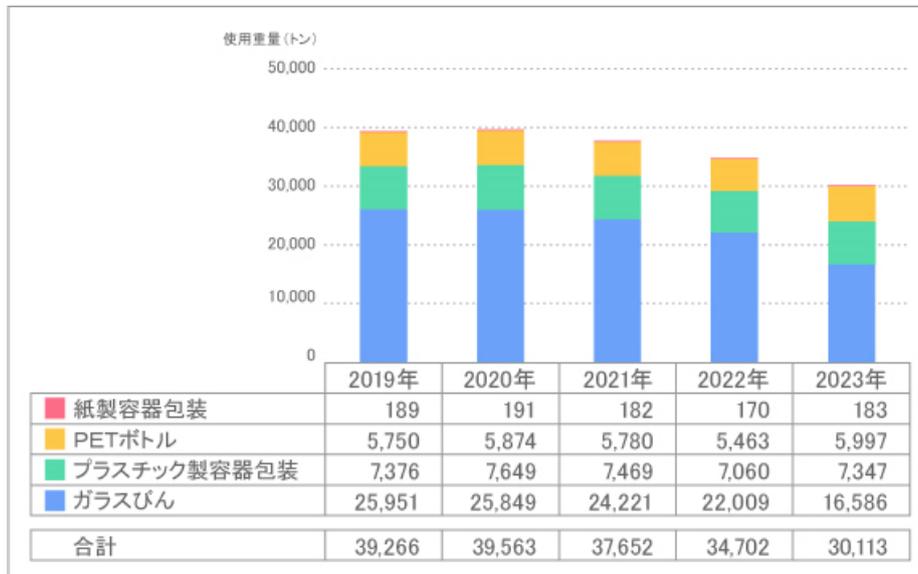
※5 リサイクル対象容器は、容器包装リサイクル法に基づき(公財)日本容器包装リサイクル協会に申請した再商品化委託量です。

環境に配慮した商品開発

容器包装は、商品の品質を維持したり、お客さまの購買を促したりと重要な役割を果たしています。商品に不可欠な容器包装をより環境に配慮したものに改良していくことを重要なテーマに掲げ取り組んでいます。

<容器包装の軽量化>

・容器包装リサイクル法対象容器の使用量の推移



容器・資材の軽量化に積極的に取り組んでいます。2023年度の対象容器包装総重量は、30,113トンでした。当社における容器材質の特徴はガラスの比率が高い（重量比で約55%）ことです。商品構成の変化によりガラスびん製品の割合が減ることで、全体として容器重量の低減が進んでおります。

<環境に配慮した商品開発事例>

・希釈タイプの黒酢ドリンク、味ぽん製品等にリサイクルペットボトルを使用

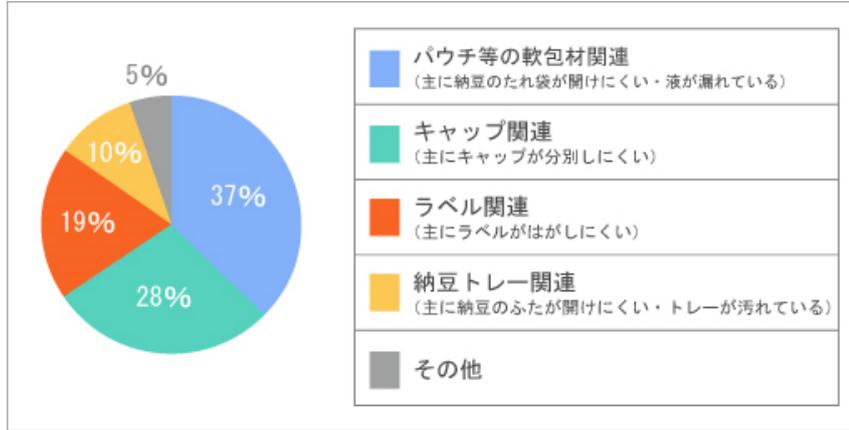
希釈タイプの黒酢ドリンク、味ぽん、すし酢製品を対象に、環境に配慮したリサイクルペットボトルに切り替えています。他の製品にも順次広げています。



<容器についてのお客さまの声>

容器についてお客様から貴重なご意見・ご指摘・ご要望が寄せられています。お客様からの声は速やかに社内ネットワークに掲載し、関係部門で共有すると共に、改善を要するものについては多角的に検討を進め改善に努めています。ラベルの改善についても、従来よりもはがしやすいラベルの検討などを進めております。

・お客様の声



<お客様の声をいかしました>

・味ぽん・味ぽんマイルド・味ぽんうまピリ・ゆずぽん・かおりの蔵丸搾りゆず 360ml 製品がペットボトルになり、ラベルがはがしやすくなりました！

お客様の声

味はいいのですが、ラベルがとてもはがしにくいです。
 プラのボトルはすぐはがせますよね。
 ビンだと重くて、割れそうで心配です。



ミツカンでは他のビン商品についてもはがしやすいラベルの検討を行っており、今後進めていきます。

改善ポイント1

変更後

変更前

ラベルの糊付け面積が小さくなったのではがしやすい！

改善ポイント2

環境に配慮したリサイクルペットボトルを採用！

改善ポイント3

容器も軽くなり、持ち運びも安心！

- 一部のお酢製品のラベルがはがしやすくなりました

お客様の声

ビンにべったり貼ってあってはがせません。
水に浸けて爪でごしごしはがしています。



ミツカンでは、はがしやすいラベルの検討を進めており、順次他製品にも拡大していきます。

改善ポイント

ラベルの糊の材質を変更したことで、はがしやすくなります



変更前



変更後



・金のごまだれのキャップがリニューアルしました

お客様の声

注ぐときに液が垂れて毎回ふいています
中栓が固くて開けにくいです



- キャップ開栓時に中栓も一緒に取れるようになりました。
- 注ぎ口の形を変えることで、液だれしにくくなりました。
- 注ぎ口が広がって、中身が出しやすくなりました。
- キャップのプラスチック使用量を約 38%削減しました。

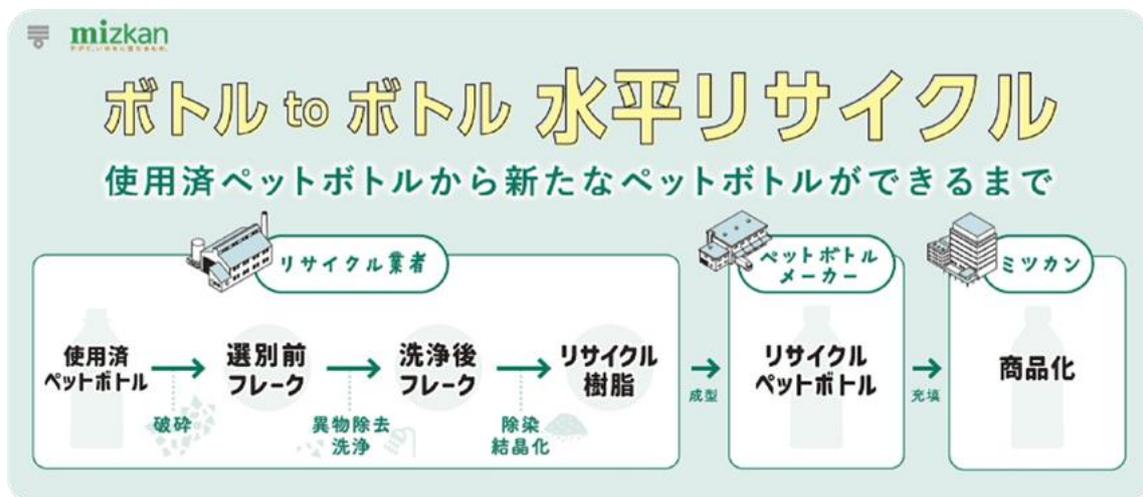


東浦町とミツカン ペットボトルの水平リサイクルに関する協定を締結
～資源循環型社会の実現に向けて、ともに取り組みを開始！～

株式会社 Mizkan（以下ミツカン）は、2023年6月28日に愛知県半田市と、9月26日には、愛知県知多郡武豊町と「資源循環型社会の実現に向けたペットボトルの水平リサイクルに関する協定書」を締結いたしました。さらに、2024年1月15日には愛知県知多郡東浦町とも協定を結びました。

日本においては、使用済みペットボトルのリサイクル率は高いものの、その多くがペットボトル以外のシートや繊維にリサイクルされており、使用後は焼却処分となるか、リサイクルしたとしても数回でリサイクルの循環が止まってしまいます。一方で、ペットボトルにリサイクルされれば、繰り返し何度もリサイクルが可能となります。このような、ペットボトルからペットボトルへのリサイクルのことを「ボトル to ボトル」水平リサイクル」といいます。

本協定により、各地域において排出・回収された使用済みペットボトルを「ボトル to ボトル」水平リサイクルとして再利用し、資源循環型社会の実現を目指しています。ミツカンは、このリサイクルペットボトルを一部商品に使用しています。



業界横断！国立市におけるプラスチック資源の自主回収テストを実施 ～持続可能な社会の実現に向けた、アールプラスジャパンとの活動の一環～

株式会社 Mizkan は、持続可能な社会の実現に向けて、プラスチック課題解決に貢献すべく、2022年5月より株式会社アールプラスジャパンに資本参加し、使用済みプラスチックの再資源化に取り組んでいます。アールプラスジャパンとの活動の一環として、東京都国立市において、プラスチック資源の自主回収テストを2024年3月から開始し、第2回目の自主回収テストを2024年6月に実施しました。

この活動は、2024年2月にアールプラスジャパンと国立市、社会福祉法人国立市社会福祉協議会とが締結した包括連携協定に基づき、持続可能な循環型社会の実現に資するとともに、地域における環境保全の意欲増進、環境教育の推進、地域コミュニティの活性化および地域福祉の向上を図ることを目的としており、アールプラスジャパンに資本参加している企業のうち4社（当社以外に、三友プラントサービス株式会社、株式会社ヤクルト本社、リスパック株式会社）と協力企業（SGムービング株式会社、CBC株式会社、株式会社DATAFLUCT、PSジャパン株式会社）などが参加しています。2025年2月までの期間に複数回実施予定です。

回収したプラスチック容器は、品質・量を調査し、アールプラスジャパンが開発中のリサイクル技術への適用を検討することにより、将来的なプラスチック資源循環の可能性を探ります。納豆容器をはじめ、今回の自主回収テストで回収する容器はPSジャパンのモノマー化ケミカルリサイクル技術※を用いて、各社の循環的取組みに活用する予定です。

※モノマー化ケミカルリサイクル技術とは、使用済みポリスチレンを高温下の熱分解と蒸留精製によりポリスチレンの原料であるモノマーに戻し、再びポリスチレンの製造をする技術です。化学的に再生するため、リサイクルを繰り返すことによる劣化がなく何回でも再生可能で、色材・臭気等は残らず衛生性も従来の石油由来品と変わりません。再生産されたポリスチレンは食品容器・包装用途にも使用が可能となります。

（参考）

- ・ [株式会社アールプラスジャパン 企業情報](#)



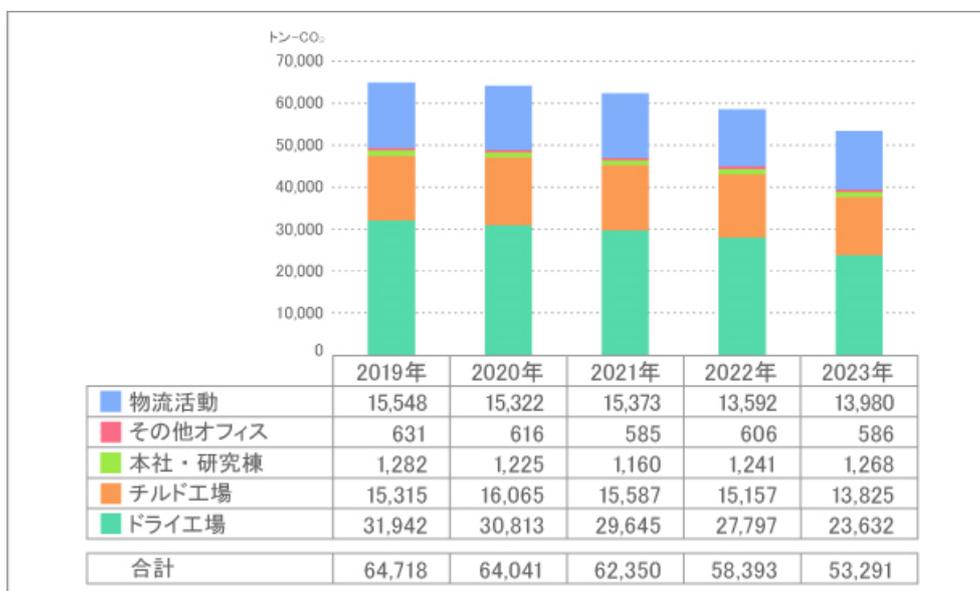
くにたち福祉会館に設置された容器回収BOX

CO₂排出量の削減

地球温暖化防止に向けてCO₂排出量の削減に取り組んでいます。エネルギー消費量が多い生産活動と物流活動では、事業特性に応じた環境効率の改善に重点をおいた省エネルギー活動を推進しています。

<CO₂排出量の推移>

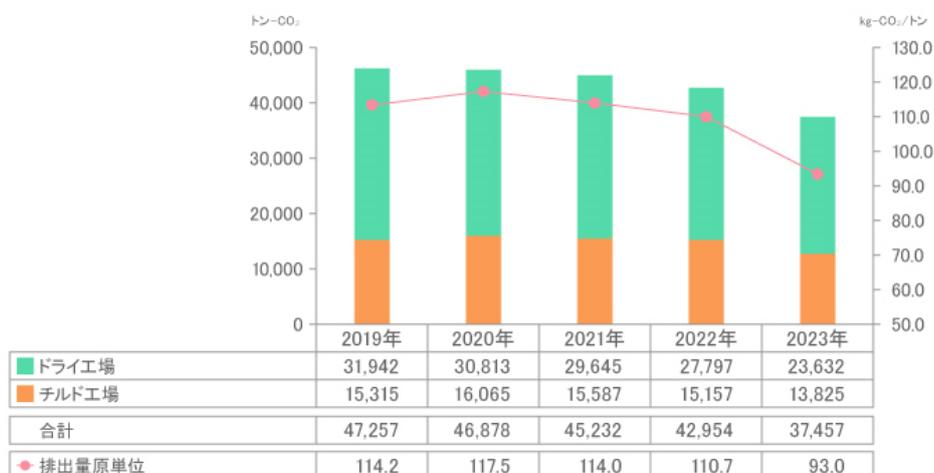
• 全体のCO₂排出量



CO₂排出量の多い生産工場、物流活動を中心にCO₂排出量の削減に継続的に取り組んでおります。2023年度、日本事業でのエネルギー使用に伴うCO₂排出量は、53,291トンで、前年度比91%と低減しました。CO₂排出量の活動別比率としては、70%が生産活動で、次いで物流活動が26%を占めました。

生産活動でのCO₂排出量

• CO₂排出量



2023年度、生産工場でのCO₂排出量は37,457トン、前年度比約87%でした。計画的な省エネ施策の取り組みなどの結果が表れております。原単位は、前年度比84%まで削減しました。今後につきましても、生産工程の改善、省エネ設備への更新などを継続的に推進していきます。

三木工場 省エネ取り組みで近畿電力利用合理化委員会から表彰

三木工場は、エネルギー管理の推進により大きな効果を上げ、他の工場・事業場の模範となることが認められ、2023年度「近畿電力利用合理化委員会委員長表彰」を受けました。

この表彰制度は、電力の有効利用、省エネルギーの推進、電力の昼夜間・季節間格差の平準化に顕著な功績をあげた工場、事業所、個人に表彰されます。

納豆工場は、冷蔵冷凍機・空調設備を多数保有しており、納豆の需要が落ちる夏場に最も電力を消費する構造になっていることが課題となっていました。これに対して、空調設備更新、屋根への遮熱断熱シート設置、間接散水冷却装置設置を実施し、さらに空調省エネシステムを導入することで電力を有効活用し、電力維持管理の高度化を実現し、142 t-CO₂/年の削減を実現しています。このことが高く評価され、受賞へと繋がりました。



物流活動でのCO₂排出量

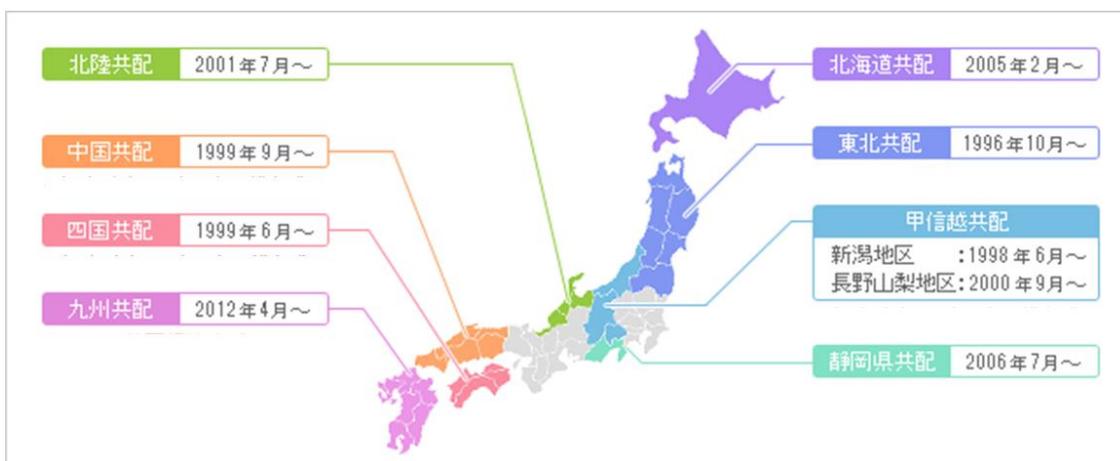
2023年度、物流活動によるCO₂排出量は13,980トンでした。モーダルシフト化率※は54.7%となっています。今後につきましてもCO₂排出量削減のため、効率的な輸配送に向けた施策を継続的に推進し、さらに改善を図ります。

※モーダルシフトとは、トラック輸送から、大量輸送が可能でCO₂排出量の少ない鉄道や船舶による輸送への転換をすることです。モーダルシフト化率は、輸送距離500km以上の総輸送トン数に対しての、鉄道や船舶による輸送トン数の比率です。

(共同配送)

Mizkanでは、1996年度よりパートナー企業との共同配送を行なっています。これはパートナー企業の商品を同一車両に積み、各社の納品先に効率的に配送するもので、各社が単独で配送していた時と比べ、配送車両台数の削減と大型化により排気ガス削減、交通渋滞の緩和、騒音抑制など環境負荷の軽減に寄与しています。パートナー企業との共同配送は日本国内面積の75%まで広がりました。

・共同配送実施地区



F-LINE プロジェクト 中部・関西地区から九州への「定期海上輸送」をスタート
 ～加工食品メーカー6社共同のモーダルシフト推進により 2024 年問題へ対応～

2024年3月から、味の素、カゴメ、日清オイリオグループ、日清製粉ウェルナ、ハウス食品グループ本社、Mizkanの6社とF-LINE株式会社は、中部・関西地区から九州への輸送において、フェリーを使用した定期海上輸送を開始しました。これにより、トラックドライバーの労働環境改善、輸送の安定化、CO2排出量の削減を目指します。

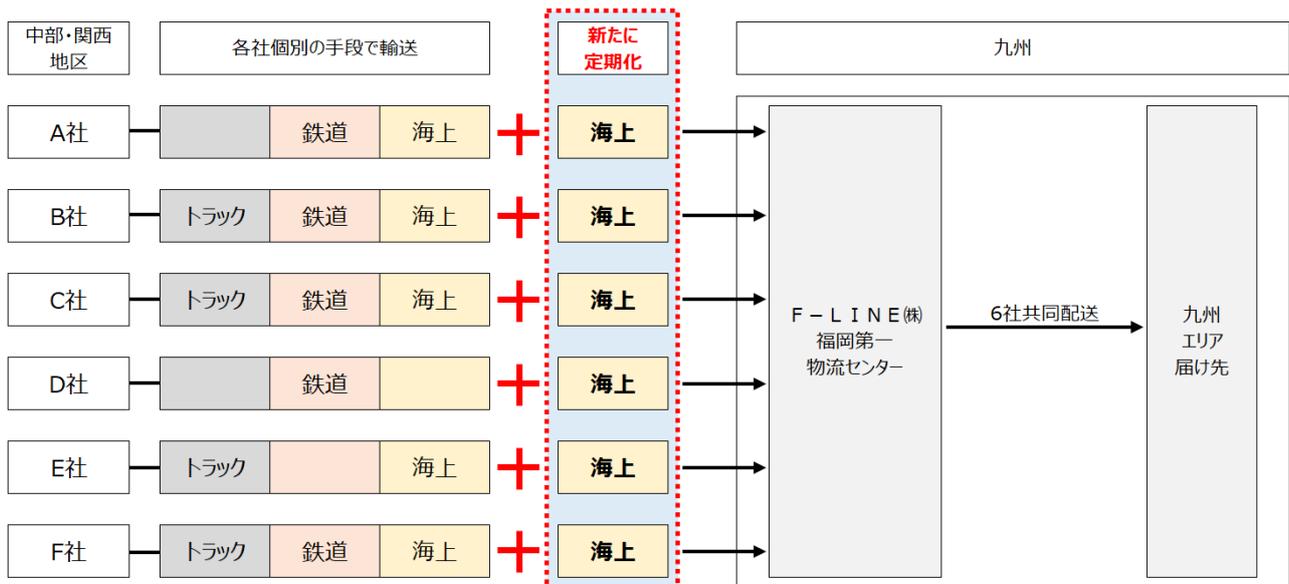
現在、各社はトラック、鉄道、海上輸送を組み合わせる九州の物流センターに商品を輸送していますが、トラック輸送の距離が600～750kmに及ぶため、2024年4月から適用されるドライバーの時間外労働時間規制に対応する必要があります。この課題に対し、フェリーによる定期海上輸送を導入することで、労働環境の改善と輸送の安定化を図ります。

政府が2023年10月に発表した「物流革新 緊急パッケージ」でも、トラック輸送から鉄道・海上輸送への転換が推奨されており、今後10年で倍増させる計画が示されています。F-LINE プロジェクトは、持続可能な食品物流の構築と環境負荷軽減に向けた取り組みを推進していきます。

なお、詳しい情報は[こちら](#)をご覧ください。

[ニュース - F-LINEプロジェクト 中部・関西地区から九州への「定期海上輸送」をスタート | F-LINE株式会社](#)

(イメージ図)

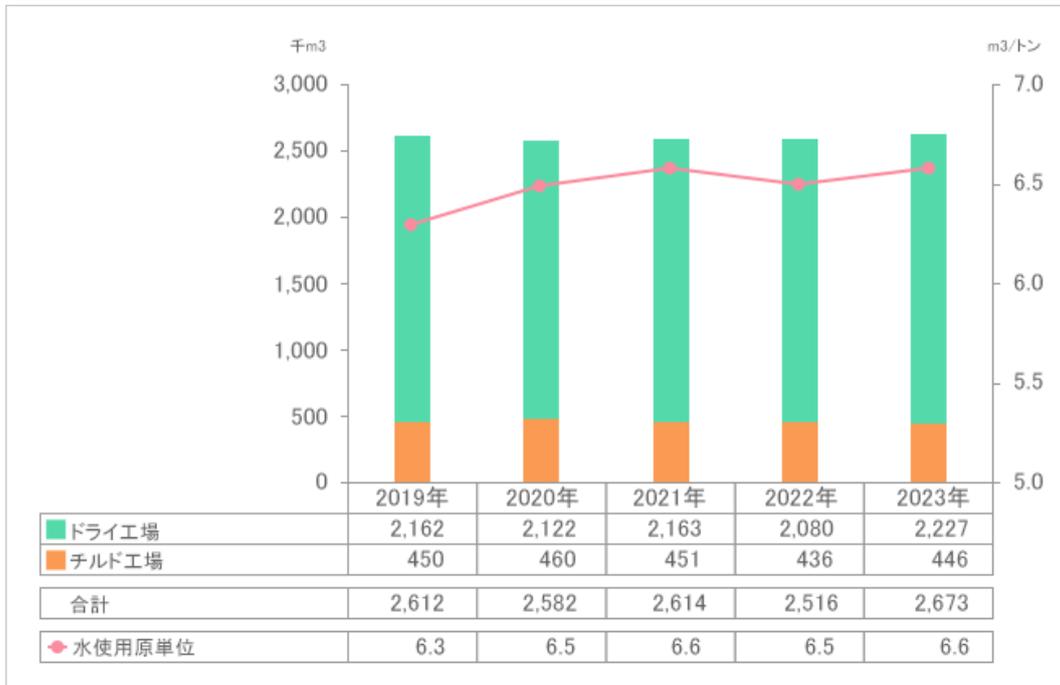


水使用量の削減

水の使用量が多い生産活動では、各種製品の製造工程特性に応じた水の効果的な活用を心がけ、節水に努めています。

<水使用量の推移>

・生産活動での水使用量



水使用量の大半を占める生産工場では、水使用量の削減に継続的に取り組んでおります。2023年度の生産工場での水使用量は、2,673千 m^3 でした。今後につきましても効率的な水の活用を通じ水使用量の削減に努めます。

地域の水を大切にする
～栃木工場で墨田区主催「水の循環講座」を実施～

2023年11月29日、栃木工場で、墨田区主催の「水の循環講座※」の第3回「産業と水」が開催されました。この企画は、2022年9月にミツカン「水の文化センター」が社員向けに実施した「ミツカンの水づかい」をきっかけに、墨田区からの依頼で実現したものです。

当日は、栃木工場の社員が先行企画での経験を活かし、水の循環に焦点を当てた工場の取り組みを参加者に紹介しました。栃木工場が行っている地下水の取水から排水処理に至る一連のプロセスや、地域の水を大切にする取り組みについて理解を深めていただきました。

栃木工場の社員が自ら説明することで、より実践的でリアルな水の循環に関する取り組みを参加者に伝えることができました。

※墨田区の「水の循環講座 2023-2024」

墨田区が主催する、現代社会に数多く存在する水の課題のなかから、「江戸と水」「ごみと水」など毎回1つのテーマを取り上げ、各テーマに関する施設見学やまち歩きを行った全5回の講座。

https://peraichi.com/landing_pages/view/sumidawater2324



排水処理設備で処理された水について参加者に説明する栃木工場の社員

廃棄物排出量の削減

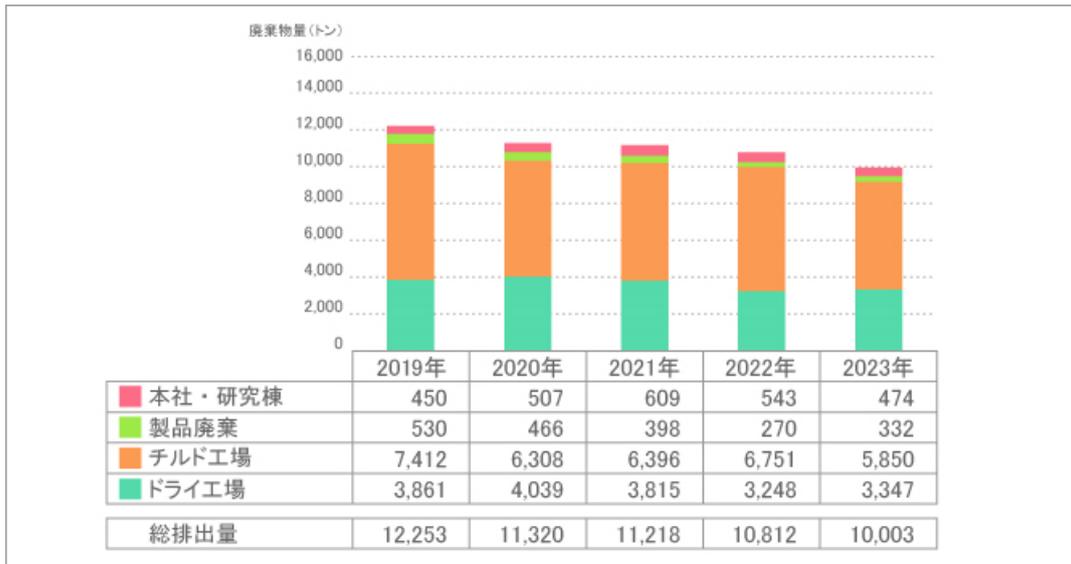
廃棄物削減の基本は、3R（リデュース・リユース・リサイクル）です。

ごみの減量を進め、ごみの焼却や埋立て処分による環境へのマイナス影響を緩和し、地球資源を有効に繰り返し使って使う 3R 活動に積極的に取り組んでいます。

< 廃棄物排出量の推移 >

廃棄物の発生抑制に取り組むとともに、発生したものについては有効活用することを目指しています。

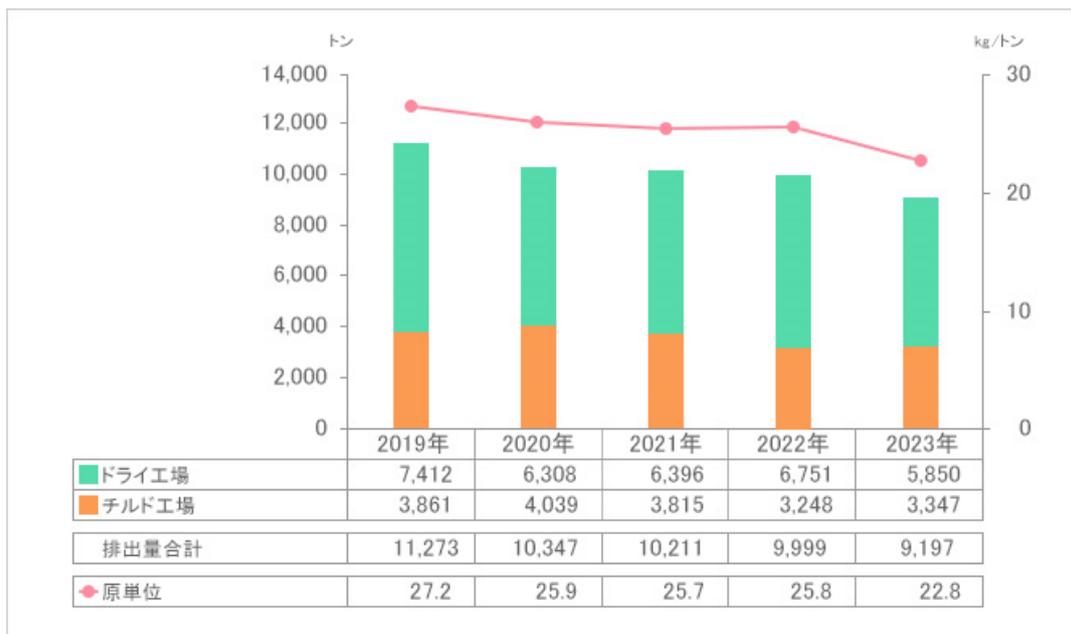
・ 廃棄物排出量



排出量の多い生産工場を中心に廃棄物の削減に継続的に取り組んでおります。2023年度、廃棄物の総排出量は 10,003 トンでした。

生産活動での廃棄物排出量

・廃棄物排出量



廃棄物排出量は、生産工場からの排出が大部分（2023年度は総排出量の92%）を占めております。2023年度、生産工場での廃棄物排出量は9,197トン、前年度比92%でした。原単位については、前年度比89%と低減しました。今後につきましても製造工程管理の見直し、改善などにより排出抑制に努めます。

販売活動での廃棄物発生抑制

常温品は、販売予測に基づき生産計画を立てて在庫を保有しますが、季節商品などで、賞味期限が近づき廃棄せざるを得ないものが発生する場合があります。販売予測精度の向上と共に、お取引様にもご理解を頂きながらこの削減に取り組んでいます。

<再資源化の取り組み>

生産活動で生じる副産物や廃棄物、販売活動で生じる返品製品などについては有効活用し、廃棄物を限りなくゼロに近づけることを目標に取り組んでいます。

生産活動・販売活動

生産活動では、生産に伴うきめ細かな資材の調達に加え、副産物の発生抑制と徹底したリサイクルに取り組んでおります。発生する主な食品系廃棄物は、酢粕、醤油粕、かつお、こんぶ等のだしがら、廃棄豆などです。また、販売活動では返品商品が主なものです。これらは、リサイクル可能な処理業者の選定を行うことで、食品リサイクル法の定める再資源化（用途は飼料・肥料及びメタン醗酵の原料など）を実施し、更なるリサイクル率の向上に努めています。

2023年度の法令に基づく再生利用等実施率（食品リサイクル率）は、84.1%でした。

	(株)Mizkan				
	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年
食品廃棄物総量（t）	9,098	8,912	8,773	8,101	8,074
再生利用等実施率（%）	83.0	82.9	78.7	81.0	84.1

フードバンク活動と食品ロス削減の取り組み

食品企業が製造過程で出る規格外品を引き取り、福祉施設などに無償で提供する「フードバンク」という活動があります。これは、まだ食べられるのに捨てられてしまう食品（食品ロス）を減らすための取り組みです。

Mizkanは「認定NPO法人セカンドハーベスト・ジャパン」や「一般社団法人全国フードバンク推進協議会」と提携し、商品を提供しています。2023年からは社会貢献の視点をより重視し、定期的な商品提供を実施しています。

「ミツカンと京都市で協定を結び、家庭の食品ロス削減を提案」

第 11 回「食品産業もったいない大賞」において「農林水産省大臣官房長賞」を受賞！

ミツカングループが、2020 年より実施している京都市との取り組み「ミツカンと京都市で協定を結び、家庭の食品ロス削減を提案 野菜を無駄なくおいしく食べつくす！『もったい菜漬け[®]・もったい鍋[®]・まるごとベーカリー[®]』」は、公益財団法人食品等流通合理化促進機構（以下、食流機構）が主催する第 11 回「食品産業もったいない大賞」において「農林水産省大臣官房長賞」を受賞^{*}しました。

※受賞理由について

「ミツカンと京都市で協定を結び、家庭の食品ロス削減を提案 野菜を無駄なくおいしく食べつくす！『もったい菜漬け・もったい鍋・まるごとベーカリー』

お酒を作る際の酒粕を酢にして活用するサステナビリティの精神が根付く同社では、事業から出る食品ロス削減の取り組みに長年に渡り注力してきた。これに加え、食品ロス発生量の約半数は家庭から出ている点を解決すべき課題と捉え、生活者に食品を届ける企業の責任として家庭の食品ロス削減にも取り組む。野菜の廃棄削減に向け、京都市と京野菜を中心としたレシピ開発を行い「もったい鍋」では「野菜の皮や芯まで使いきる」提案、「もったい菜漬け」では「野菜を長持ちさせる」提案など、食品ロス削減に繋がるレシピを開発。「九条ねぎ」や「聖護院だいこん」、「京おくら」など京野菜を使ったレシピに加え、一般的な野菜でもレシピを提案。JA 京都中央が販売に注力している「京おくら」は大幅に生産が拡大する実績をあげ、企業からの発信による食品ロス削減と地産地消の振興を掛け合わせた好事例。

なお、受賞内容の詳細はこちらでご覧いただけます。

食流機構 第 11 回「食品産業もったいない大賞」公式サイト

<https://www.ofsi.or.jp/mottainai/kekka11/>



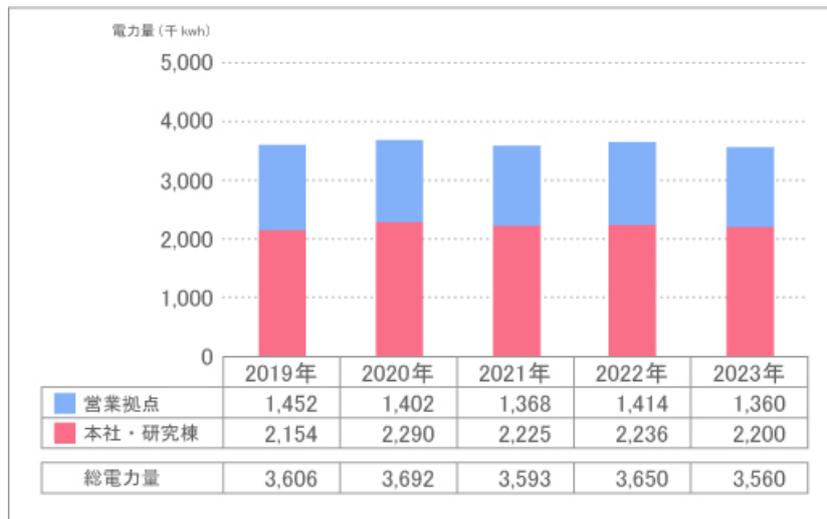
オフィスにおける環境配慮

オフィスからは、主に電気、ガスなどのエネルギー消費とそれに伴うCO₂の排出、さらには紙・ゴミの排出などの環境負荷があります。これらは生産活動から発生する負荷に比べると格段に少ないものの、無視できません。

<電力の節減>

2023年度のオフィス部門全体の電力使用量は、3,560千kwhでした。今後につきましても、業務の効率化などの地道な活動を継続することでエネルギーの効率的な利用に努めていきます。

・オフィスの電力使用量の推移



社会・環境活動

当社では、社会の一員としてその健やかな発展に貢献し、環境や地域との調和を図り、食文化を基点にした活動を行っています。

<MIZKAN MUSEUM（ミツカンミュージアム）>

[「MIZKAN MUSEUM」の取り組み](#)

<ミツカン「水の文化センター」>

[「水の文化センター」の取り組み](#)

<山林の育成>

[「山林の育成」の取り組み](#)

<ビオトープ>

[「ビオトープ」の取り組み](#)

<一般財団法人 招鶴亭文庫®>

[一般財団法人 招鶴亭文庫®](#)